巻頭言

山梨県立中央病院　放射線科
栗山　健吾

多くの情報が飛び交い、科学・技術の進歩が著しい現代において、肺癌はいまだに予後不良の癌であり、様々な分野において解明すべき研究課題は山積みとなっています。その中で、実際の臨床の現場にいる医師としては、最大限の知識を持って、最善の治療を患者に提供しなくてはなりません。化学療法、手術療法、放射線治療など、肺癌に対する治療法は専門に分化しており、最善の治療を提供するためには、各専門医師間での連係プレーが必要です。局所進行肺癌に対する治療戦略は、スタンダードとなる治療法がいまだ明確ではなく、手術療法の意義、導入化学療法の使い方、放射線治療の役割は曖昧です。各専門分野の医師による情報交換、疾患へのアプローチに関する理解をもって、初めて最善の治療（すなわち集学的治療）が行えるのではないでしょうか。

一方、肺癌が難治性癌であることから、早期発見、早期癌治療にも関心が集まってきました。早期発見には、肺癌検診が重要な役割を果たし、特に高分解能CTにおけるすりガラス像(GGA)の診断技術の進歩は今後も期待される点であります。早期癌の治療には、従来の葉切除などの外科的手術の他に、高齢者、慢性閉塞性呼吸疾患患者にも適応を広げている定位放射線治療が世界的に進歩・普及しつつあります。

今回の研究会では、13題もの多くの一般演題が集まりました。GGAや定位放射線治療などの早期肺癌に関する演題や、化学療法をからめたmultimodality therapyに関する演題が目に付きました。特別講演では、福井大学放射線科の伊藤春海先生から、肺のミクロ解剖とCT像、肺実質病変の関係を分かりやすくご教授頂き、興味深い講演会でありました。

今後とも、内科、外科、放射線科をはじめ、肺癌に関わる多くの診療科の先生方に研究会へ参加して頂き、情報交換、他分野の知識の習得の参考になることを期待します。